

和帳面四十三再考

蓮 沼 啓 介

始めに

1. 問題の所在
2. 和帳面四十三の成立時点
3. 哲学関係断片一、二、三の成立時点
4. 哲学関係断片四の成立時点
5. 哲学関係断片五の成立時点
6. 哲学関係断片六、七の成立時点

始めに

本稿は北東アジア地域学術交流財団の研究助成を受けて行われた西周研究会における三年間の研究の成果として明らかになった和帳面四十三（西周文書20）に書かれた哲学関係断片の成立時点の推定を紙幅の許す範囲でまとめ上げたものである。

1. 問題の所在

西周文書¹⁾の137に靈魂一元論という漢文の一文が残されている。人間精神の独自性を論じたこの一文は個人の精神が肉体から分離独立していることを哲学的に根拠づける西の思索のひとつの頂点を示す作品である。

だが、靈魂一元論の執筆年代については、これまで不透明な物言いが行われて来た。その成立の事情に不透明なところがあり、様々の疑問点が残されていたからである。

靈魂一元論はこれまで明治三年中の作品と見なされて来た。

既に第一回全集用の筆写原稿が『明治三年起稿』と註記し、麻生義輝もこれによってやはり『明治三年頃起稿』としている²⁾からである。西周全集の編纂者である大久保利謙も先行研究に従い、『明治三年起稿』という推定は「まず妥当な推定とみていい」³⁾と語っている。第一回全集編纂の動きは相澤英次郎が中心になって進めた企画であるが、この企画には森鷗外も協力している。『明治三年起稿』という註記が誰の推定に基づく年代であ

るかは、どうもはっきりしない。あるいはそう推定したのはもともと鷗外であったのかも知れない。鷗外自身が明治三年と推定していたかどうか確証はないが、鷗外も同じ意見を持っていたことはほぼ間違いのないところであろう。

『西周伝』には明治四年の記事の中に次の記事がある。

是日侍読の命を受く。所謂御談会は其講筵なり。九月五日始めて進講す。その科目には博物学、心理学、審美学、英主比較論、英国史等あり。

いわゆる宮中「御談会」における講義は『西周伝』によれば明治四年中の出来事であった。その内容から見ても靈魂一元論の方が「御談会」において講義された「心理学」や「審美学」つまり「人智論」⁴⁾とか「情智關係論」⁵⁾や「美妙学説」⁶⁾よりも前に成立した作品であることは明白である。もし「御談会」における講義が鷗外が考えていた様に明治四年中の出来事であったとすれば、靈魂一元論の成立が明治三年頃に求められるのは当然の推理の帰結である。鷗外はこう推理して靈魂一元論の成立時点を明治三年前後と推定するに至ったに違いない。

第一回目の全集の編者たちも、同じ様な推理を経て、靈魂一元論の成立時点を明治三年前後と推定したに違いない。確かに、もし西が「美妙学説」「人智論」「情智關係論」を講義した時点が明治四年であるとする鷗外の考証に間違いがないとすれば、靈魂一元論の成立時点を明治三年前後と推定することは誠に尤もな無理の無い自然な推理であったと言える。

だがこの推定には問題が伏在していた。西の思索の発展を跡付ける探求を史実から逸らすという歪んだ効果を発揮してしまったからである。

靈魂一元論の成立時点を基準として他の作品の成立時点の推定が行われた。例えば「哲学關係の断片」のうち一から二九までの部分は「内容的に『靈魂一元論』『生性發蘊』と一連のものであるから、この帳面の大部分は『生性發蘊』が脱稿した明治六年以前であることは疑いなく」⁷⁾と全集解説は推定する。

だが、実際には「所謂御談会」⁸⁾の講義は、西が明治九年一月十九日に宮内省御用掛を命じられた後に行われたものである。西は明治九年中に「英主比較論」と「人主比較論」を十一年に入って「人智論」「情智關係論」などを御談会の席で論じており、明治十二年の「一月十三日」に「美妙学説」の第一回目の講義を行っている⁹⁾。

実は『西周伝』に見える宮中で行われた御談会関係の記事には混乱が見られるのである。西は明治四年「辛未八月十五日」に宮内省侍読を命じられ、九月五日には「英国史」を、「九月十日」には「博物新論」を若き君主に講義している。

ところで西は明治九年一月十九日も宮内省御用掛を命じられている。¹⁰⁾

鷗外がこの二つの機会を完全に混同していることは明白である。混同の原因ははっきり

しないが、混同の結果、「靈魂一元論」¹¹⁾の成立時点を明治三年前後と推定するに至った模様である。

従って、靈魂一元論については新たに成立時点の推定をやり直す必要がある。同時に靈魂一元論の成立時点を基準に行われた他の作品の成立年代の推定も初めからやり直す必要が生じることになる。

本稿の結論を先取りして予め要約して置こう。

Haven, Joseph. *Mental Philosophy* の訳語を掲げる和帳面四十三に靈魂一元論の草稿が含まれている¹²⁾。この和帳面を見る限り西が『心理学』の訳出に取り組んだのは明治七年頃のことであったと推定される。従って靈魂一元論の草稿は明治八ないし九年の作品と推定して間違いはなさそうである¹³⁾。

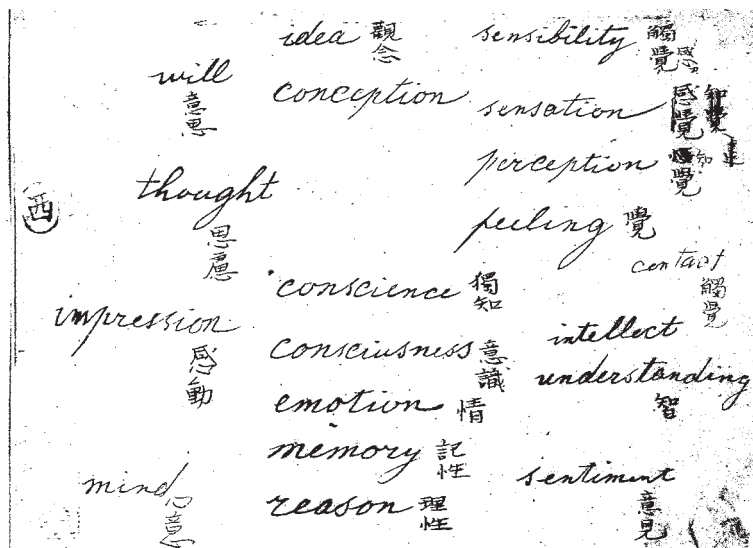
とすれば靈魂一元論の成立時点を基準として行われた他の作品についても基準時の変更による成立時点の推定を初めからやり直す必要がある。全集解説は「靈魂一元論」がまず成立して、その後に「生性發蘊」が成立したという想定に立っており、実際の順序を逆転させてしまっているからである。実際には「哲学関係の断片」は「生性發蘊」が脱稿した明治六年以後に書かれたものである。靈魂一元論の草稿は明治八ないし九年の作品であり、それ故、その浄書本である靈魂一元論は明治九年中の作品と推定される¹⁴⁾。

2. 和帳面四十三の成立時点

靈魂一元論の草稿が書かれた和帳面四十三の成立時点を推定し直そう。

まず生理学と題された和帳面卅七に見える英単語の訳語表と和帳面四十三に見える訳語表とを比較対照して見よう。こうすれば、西がまず和帳面卅七を使い、その後に和帳面四十三を使ったことが判明するからである。

生理学と題された和帳面卅七¹⁵⁾の表紙の裏には次に引く訳語表が書いてある。



生理学と題された和帳面の中程には、A. コント哲学を解説したG. H. Lewesの著書である Comte's Philosophy of the Sciences のうち第19章と第20章の訳文が書き綴られている。この和帳面が『生性發蘊』の草稿であることは明白である。従って上の訳語表は『生性發蘊』を執筆するために作成されたものと推定される。

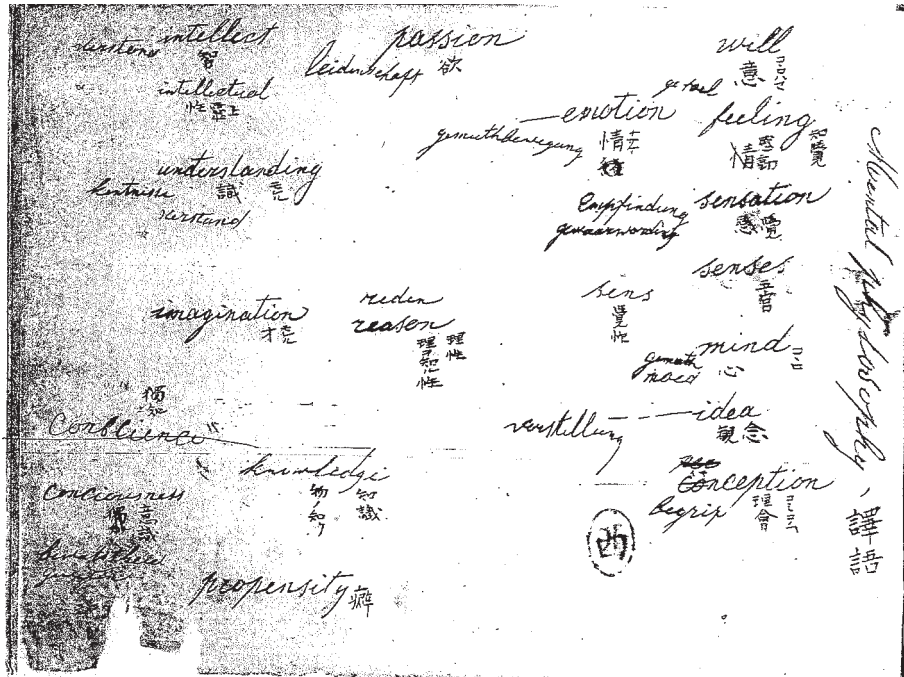
これとほぼ同一の訳語表が和帳面四十三¹⁶⁾にも見える。七葉目の表に次に引く訳語表が書き込まれている。哲学関係断片の三と四の間の位置に当たる。

reflection 省察	consciousness 意識	feeling 覺
sensibility 觸覺	conscious 獨知	contact 接觸
sensation 感覺	will 意志	faculty 能力
perception 知覺	thought 思想	instinct 本能
idee 觀念	mind heart 心意	conception 理會
intelled 智	impulse 衝動	
reason 理性	impression 印象	
memory 記憶	judgement 辨別	
sentiment 覺說		
emotion 情		
affection 情致		

understanding を除けば先の訳語表に見える単語が残らず採録され、ほぼ同一の訳語が当てられている。新たに reflection と affection と heart と impulse と judgement と faculty と instinct というの七つの単語が加えられているだけである。この訳語表は和帳面卅七に見える訳語表を写し替え、新たに若干の単語を加えただけのものと推定される。

更に和帳面四十三の一葉目の表側には「Mental phylosophyノ譯語」という見出しが縦向きに書いてあり、その傍らに文字の向きが直交する方向に横向きに次の訳語表が書かれている。

和訓を振った箇所もある。「意」には「コ、ロハセ」と和訓が付してある。「情」には「ナサケ」とある。「識」と「才」には「キレル」とある。「心」には「コ、ロ」とあり、「理會」には「コ、ロコム」とある。また「知識」には「物ノ知り」と和訓を付し、「理性」には「理ヲ知ル性」という訓みが付してある。



「智」「欲」「意」の三機能に互る精神作用の分類に立つこの訳語表は、見出しを見るまでもなく明らかに Joseph Haven の Mental Philosophy の翻訳に着手した後に書き込まれたものである。先の訳語表と比較対照すれば、こちらの訳語表の方がはるかに詳しい発展したものであることは一目瞭然としている。そもそも先の訳語表は英単語とその訳語に限られているのに対して、こちらの訳語表では、英単語ばかりでなくて独仏蘭といった単語も散見される。「覺性」が sens というフランス語の訳語であることは面白い。

西は「生性發蘊」第一巻の校正を明治六年六月までに完了しているし、『心理学』の翻訳に着手した時点は明治七年の七月頃であったと推定される。こうして見れば西が和帳面の卅七を使った後に和帳面の四十三を使い始めたかと推定してもまず間違いは生じそうもない。西はまず訳語の整理を図り、更に独仏語への拡張を企てたものであろう¹⁷⁾。

なお「人類發達史」の翻訳草稿が「和蘭紀行一部算法其ノ他原稿」という題の付いた別の和帳面（西周文書11）に見えるが、序文の書かれた罫線紙の欄外上段に「云何惟人ト題シタル原稿ノ第一冊ニシテ他ニ記載シアリ 廿九年五月」と書き入れがある。西は明治「廿九年五月」の前後に稿本の点検を行い、甲乙丙丁に分類した上で、それぞれの稿本の表紙に朱筆で番号を書き入れた様子がここから窺われる。西が自筆の文書の最終的な整理点検に取り組み「西周ニ關スル書類扣」（西周文書172）を書き上げた時点は従って明治二十九年中であり、それも初夏の頃であった模様である。それは恐らくは西の人生にとって最後の仕事であったのかも知れない。この控えの御蔭で西周文書のうち晩年には西の手元にあ

りながらその後紛失して現在では缺本となった稿本の名称と数が判明する。

3. 哲学関係断片一、二、三の成立時点

そこで、こうした推定を補強するために、更に和帳面四十三に書き込まれた断片の内容を点検して、それらの断片が作成された年月を推定して置こう。

まず表紙の裏に書き込まれた哲学関係断片の一¹⁸⁾を引用し、分析を加えて見る。

一元論 二性論 知覚運動 感覚知覚通性論 大脳論 小脳論 十四欲論
九情論 美妙論 道德論 律法附致知論

この簡潔な学問分類には明六社時代に西が抱いていた哲学の構想が示されている。今、それぞれの名称に対応する作品を並べて対照して見よう。

一元論	靈魂一元論	哲学関係断片の十七
二性論	覚作二性論	哲学関係断片の十八
感覚知覚通性論		
大脳論	大脳二官論	哲学関係断片の二十一
小脳論		草稿類一括の中に短文の断片あり
十四欲論		哲学関係断片の十九・二十
九情論		哲学関係断片の八～十一
美妙論	美妙学説	全集第一巻
道德論	人生三宝説	明六雑誌ほか
律法論（正義論）	原法提綱	全集第二巻
致知論	知説	明六雑誌

西の哲学の構想が人間論を中心に据え、真善美という価値を論じる論稿に至る堂々たる体系の骨子から成り立っていることは明らかである。

哲学関係断片の十五を見ると、これに開宗篇と講法論が加わることが分かる。西がその哲学の構想を宗派の説法に準えて考えていたことがここから推し量られる。

また「律法付致知論」とある点は見逃せない。ここには精神的な自由権を軸とする基本的な人権の究極の根拠づけは、論理学の真理つまり思考の法則に求められるという西の直感が示されていると解釈されるからである。言い換えれば、人間精神の自律性や個人の尊厳という近代的な基本価値の究極の根拠は、論理の普遍性にしか基礎づけられないことに薄々ではあるが、西が既に気づいていることがここから窺い知られるからである。

次に哲学関係断片の二と三を点検しよう。断片の二と三の内容は百一新論という物理と

心理の区別の論の続きである。百一新論は明治七年の三月に刊行されている。断片の二と三は百一新論が刊行された折に書かれた、言い換えれば明治六年中か明治七年初めに書かれた断片であると推定される。次に順次引用する。

まず断片の二を引用し解析を加えて置こう¹⁹⁾。

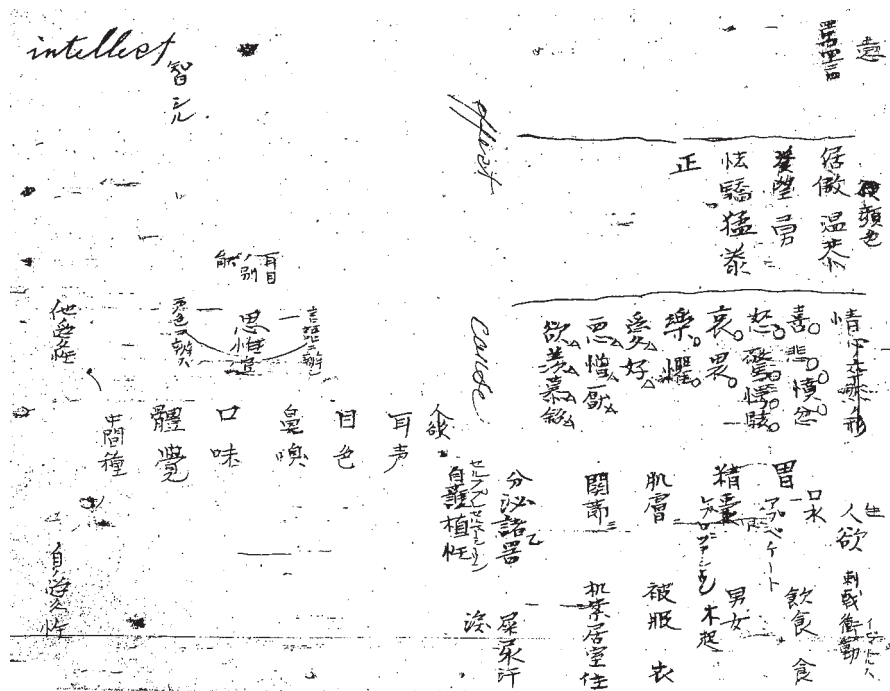
智義本一ツモラルニ在テ義ト云ヒ物理ニ在テ智ト云フ

物ヲ受テ従ハネバナラス 物ヲ授ケテ従カハスル

物ヲ受テ痛タイ 物ヲ衝テ痛メル

理法の発現する領域が「モラル」であれば「義」というのに対して、理法の発現する領域が物体の領域であれば「智」という。原因 cause とその結果 effect という因縁の関係がここでいう理法の内容である。物理と心理の区別について新しい見地から解説を試みているわけである。

次に断片の三を引用し解析を加えて置こう²⁰⁾。



「意」意志と「智」知識という精神作用を対照した図式である。心理と物理の区別と対照に対応する図式である。うち心理の側には、「意」の外に「情」と「欲」が配置されている。「意」と「情」つまり意志と感情の関係は原因と結果の関係に置かれている。感情が cause 原因であり、意志が effect 結果である。同様の原因と結果の関係が感情とその現

れである「顔色」の間にも成立している。

「欲」欲望については欠如に基づく欲求と過剰に基づく欲求とが並列されている。一二三の番号は欠如に基づく欲求を示す。甲乙という符号は過剰に基づく欲求を示す。欠如に基づく欲求は補充による満足を求める。過剰による欲求は排出による満足を求める。「胃」とか「肌膚」とか「関節」とかいった身体の部位が欲求の基体とされているところは見逃せない。机や住居は関節にやさしいということであり、机や住居を活用すると関節の負担が少なく済むということなのであろう。解剖学の所見に従う限り、身体の部位は部品のように扱って当然である。西は青年の日に外科を目指した体験の持ち主であった。解剖学の知見はこうした体験を持つ西にはなじみやすいものであったに違いない。いわば部品である人間の部位を統合する作用を西が精神の作用に求めていたらしいこともここから窺われる。

欲求は刺激に応じて衝動を発生させる。例えば男女は互いに刺激し合い、衝動が引き金となって「木起」が起こるといふことの様である。それにしても片カナの英語は読みにくい。「イピュールス」「アペチート」「レプロダキシウン」「セルフプレゼルベシウン」がそれぞれ impulse, appetite, reproduction, selfpreservation とはとても思えない。英単語の読み方は、ひどい逐語調であり、信じられないほどである。これは驚くべきことである。

さて物理の側には「智」が配置され、「耳目鼻口體」という五つの感覚器官とそれぞれに対応した「聲色嗅味覺」という五種類の感覚形象が配列されている。耳目や声色という順序に東洋の語感が良く現れている箇所である。また触覚が指先の感覚としてではなくて全身の「體覺」として把握されているところに認識論における西の特質が認められる。西周はあくまでも東洋的な知識人であった²¹⁾。

4. 哲学関係断片四の成立時点

さて哲学関係断片の四と五はカント哲学に関連する断片である。おそらくは明治七年七月に刊行された『致知啓蒙』を介して生じた影響を記したものであろう。カント哲学のうちでも特にカテゴリー論の部分である。あるいは統覚の示す統合作用に媒介されて、単一の靈魂という觀念を獲得したのであったのかも知れない。まず断片の四を取り上げ、部分に分けて引用し、解析を加える²²⁾。

matter	實	在實	虚	space
stof (蘭語)				
property	性	念觀	時	time
force	彼客 力觀		主 觀理	
	形		數	number

matter	實	在實	虚	space
stof				
property	性	念觀	時	time
force	彼客 力觀		主 觀理	
	形		數	number

カント哲学における空間と時間という感性的直観の二つの純粹形式とそれに対応した思考の純粹形式であるカテゴリーの表を簡潔に解説した断片であることは見やすい。空間は実在の領域に関する純粹形式であるのに対して、時間は観念の領域に関する純粹形式である。実体 matter は実在の領域に関する思考の形式であるのに対して、性質 property は観念の領域に関する思考の形式である。実体の与える刺激が観念の領域において性質を産出するわけである。思考は外界の知覚であり同時に内省でもある。言葉を代えて言えば思考は実在の領域に存立する事物を対象とする意識であるばかりでなく、観念の領域に存立する意識の作用自体を対象とする意識の自己反省の作用でもある。判断は実在に関する知覚という意識の作用の所産である性質を、元の実在に帰属せしめる精神の作用である。こうして観念の領域は性質という客観の分野と時間という主観の分野の両極に分かれる。時間や理法や数量は主観の側に備わるカテゴリーであるのに対して、性質や動力や形体は客観の側に位置するカテゴリーである。

實ハ虚ニ依テ立チ虚ハ實ニ依テ立ツ

然ドモ虚ハ必ズ實ヲ兼ネ實ハ虚ニ含マル

是ニ由テ

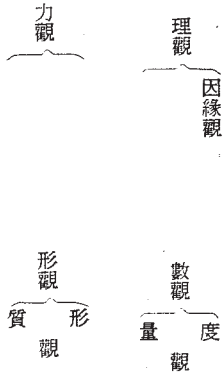
性ハ實中ニ存ス 然ドモ時無レバ性ナシ苟モ性ト云ヘバ多少永續ノ意アレバナリ

力ハ實性ノ發スル所然ルニ發スルノ前ニ發スベキ理アリ

實ハ必ズ形アリ形アレバ數必ズ之ニ從フ

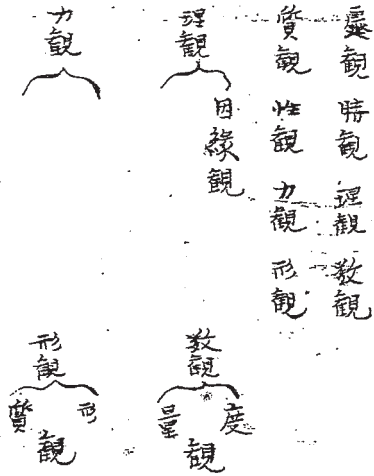
実体と空間とは不即不離の関係にある。実体は常に空間の内部に存在するし、実体を欠く空間も存在しない。事物の性質は時間の内部に発現する。性質は持続するものでしかあり得ないからである。瞬時に出現し瞬時に消滅するものは性質とは呼べない。実体が観念の領域に産出する性質は、時間と空間を結合する精神の統覚作用によって実体と結合され、かくて性質は実体の内部に存立するという判断が成立する。実体の内部にある性質が動力を発生させる。動力には先行する理法がある。原因となる性質があつて初めて結果としての動力も発生する。実体は有限の形体を示しているので、個数を数えることができる。或いは液体や気体の場合には数量を測定することができる。実体とその運動は数量により正確かつ精密に観測することが出来る。自然認識を基礎づけるカント哲学のカテゴリー論の簡潔な要約であることは見やすい。「理」つまり理法が原因と根拠の双方を示すカテゴリーとして把握されていることは見逃せない。

「虚観」とは空間というカテゴリーのことである。「時観」とは時間というカテゴリーのことである。「數観」とは数量のカテゴリーのことである。「質観」とあるが「實観」という語が紛らわしいために「實」に代えて「質」を用いて実体のカテゴリーを示したものであろうか。「性観」とは性質のカテゴリーのことである。

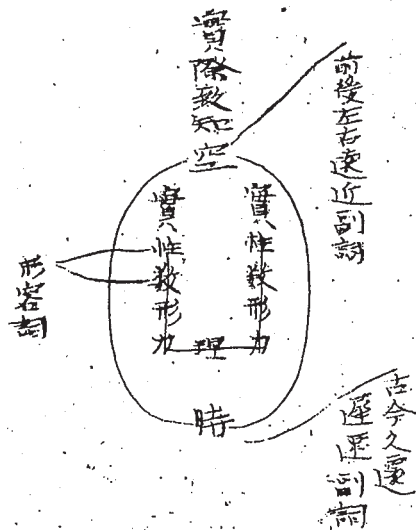
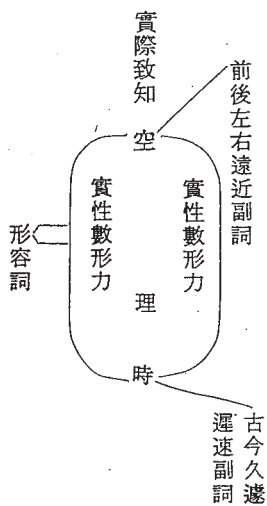


處観
時観
理観
數観

質観
性観
力観
形観



数量のカテゴリーは「度量観」すなわち程度や分量を思考する形式であるし、理法のカテゴリーは「因縁観」すなわち因果関係を思考する形式である。性質のカテゴリーは「性質観」すなわち形容や性能を思考する形式である。関係のカテゴリーと様相のカテゴリーについては説明が欠落している。カント哲学に関する西の理解がまだまだほんの初歩的かつ断片的な段階にしか達していないことは明白である。「理」と「力」と「形」の関連をどう捉えるかという点に混乱が集中していることも明らかである。



西が品詞分類とカテゴリー表とを結合する試みに手を染めていることは刮目に値する。品詞の分類とカテゴリーの関連は未開拓の分野である。語用は複雑な慣用が結晶した形を取るが、慣用が成立するに当たって当初はカテゴリーに適った用語の使用が図られたと

ひとまず考えられる。反復される用法から慣用が生成し、一度生成した慣用は独自の発展変化を遂げ、複雑な慣用の併存する日常の言語が成立するに至ると見通すことができる。

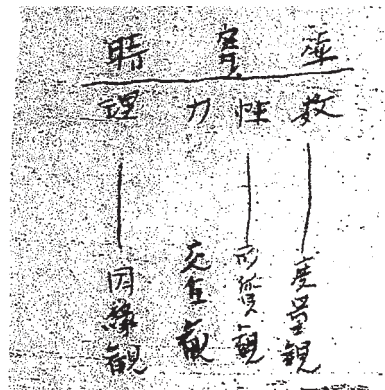
知識ハ唯理ヲ知ルニ在リ
 理ヲ知ラント欲セバ性ヲ知ルニ在リ
 性ヲ知ラント欲セバ形ト數トヲ審カニスルニ在リ
 然ルニ尚兩物ノ性ヲ知りタル上ニ空ト時トヲ合論ズベシ

「理」つまり理法が「兩物」二つの物体や現象の関係として把握されていることは間違いない。それぞれの物体や現象の形容と度量とを審らかにした上で、空間と時間の中にそれぞれの物体を置き直して観察すれば、物体の関係である理法が明白になる。「知識ハ唯理ヲ知ルニ在リ」自然の理法である自然法則の知識がこうして獲得されることになる。

5. 哲学関係断片五の成立時点

次に断片の五である²³⁾。断片の五はカントのカテゴリー表を東洋思想の伝統と突き合わせて、その調整や総合を図る試みである。五つの区画に分けて解析を試みよう。

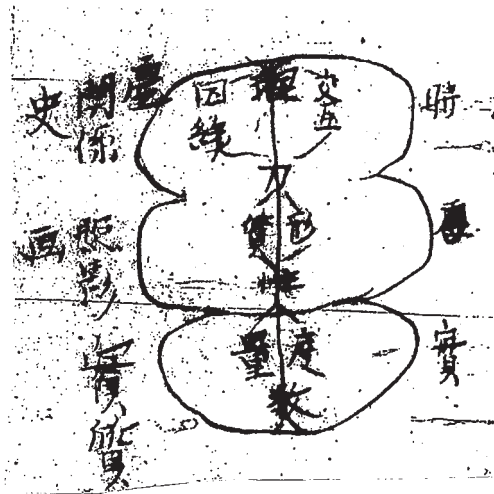
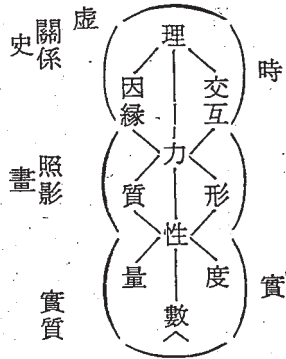
時	實	虚
理	力 性	數
↓	↓	↓
因緣觀	交互觀	度量觀



関係のカテゴリーに含まれる因果関係と相互関係とが「因縁觀」と「交互觀」として取り出されている。関係のカテゴリーに関する理解が一步深まったことを示す箇所である。

とはいえ「交互觀」という作用反作用という力の相互関係を示すカテゴリーが関係のカテゴリーではなくて性質のカテゴリーに接近する位置に置かれていることは見逃せない。感覚の内実を示す「實」と実体を示す「實」の関連が十分には把握されてはいないために発生する不透明な揺らぎの部分である模様である。実線による結びつけが「交互觀」の箇所だけ欠けているのもそうした不透明の表出であるに違いない。複雑多岐に互る無数の感覚が統覚の統合作用により実体というカテゴリーの適用を受け物体に構成されるというカント哲学の核心には未だ西の探求は届いてはいないのである。

次はカテゴリー相互の関連を図に示した図式である。



数量のカテゴリーと性質のカテゴリーと関係のカテゴリーの一部がそれぞれ「数」「性」「力」という標語の元に配列されている。全体を統括するのは「理」である。数量のカテゴリーの筆頭は実体であるが、その内実は「実質」つまり色々な材質である。性質のカテゴリーの内実は仮に絵画を例に取れば「照影」つまり様々の陰影である。関係のカテゴリーの内実の例としては歴史が挙げられる。原因と結果により歴史的な出来事の説明が行われることは周知の通りである。西はカントの説くカテゴリーのうちに理法の内実を探りそう捉える試みに踏み込み始めているのである。

次の断片は東洋思想に用いる基本的な対概念と、カント哲学にいうカテゴリーとを比較対照し、折衷総合を模索する試みである。虚実の「虚」に代わって「空」が space の訳語として登場していることは見逃せない。

	時	實	空	
實	主	因	全	性
名	客	果	分	力
實	因	全	性	任
在	果	分	力	用
				古
				彼
				今
				此

	時	實	空	
實	主	因	全	性
名	客	果	分	力
實	因	全	性	任
在	果	分	力	用
				古
				彼
				今
				此

「彼此」「古今」といった時空における対照や「因果」原因と結果とか「全分」全体と部分とか「性力」性能と効力とか「任用」任命と使用といった対照概念は東西を問わず、使われていて、内容は極めて似ている。しかしながら「主客」という対概念では主人と客人の対照を示す東洋の伝統的な用法と主観と客観の対立を示す西洋哲学の用法とはまるで違っている。主観と客観の分離と対立の内に西洋近代の存在了解が凝縮していることに既に西は気づいているのである。

次の断片は現象と実在を対照する試みである。性質を定性と捉え、力を力能と捉えて、性質と力能あるいは性能と効力という二つのカテゴリーの関連を整理しようとする試みである。

戦	引力	事	動	(変動)
兵隊	天体	物	性	(定性)
	質	質	實	(内実)

現象を力動状態と捉え実在を静止状態と捉えて双方を対照した表である。出来事は変化発展の位相にあるのに対して、物体は定常静止の位相にある。引力は作用であるのに対して、天体は実体である。物体や天体の素材は材質からできている。戦いは動きであるのに対して、兵隊は定数である。西が兵隊と戦いを事例に持ち出しているのは、この頃西が陸軍省に勤務していたことの反映であろう。

次の断片は次元に沿って文化要素を単純なものから複雑なものへと配列する試みである。時間と空間というカテゴリーに触発されて次元の累積という発想にたどり着いたものと思われる。

饒	畫	點竄	百	歴史	識	文	文	山水	地形畫	結合
					致知					
品	形	幾何	十	生傳	学	語	字	人物	影畫	バンド
味	色	算	一	事件	美妙	才	音	畫	折枝	線畫
										元素

要素が単純なものから複雑なものに移行発展する事例を一次元と二次元と三次元という風に並べているわけである。「元素」は一次元を示す。「バンド」bands つまり隊列は二次元を示す。「結合」は三次元を示す。一は一桁を示す。十は二桁を示す。百は三桁を示すという具合である。感覚を捉える性能である感性と言葉を掴む能力である悟性と推理を実行する能力である理性という人間主観に備わる認識の能力にそれぞれをほぼ対応させているわけである。「線畫」は単線的であるが、「影畫」は影の如く平面的であり、「地形畫」は地形の如く立体的である。「折枝」とは etching のことであろうか。人物画は平面的であ

るのに、山水画は立体的である。画数を重ねて字を書く。字を複数並べて文を作る。これは文章の複雑性に関する分析である。次に発音を重ねて単語とし、単語を並べて文を述べる。これは言語の複雑性に関する分析である。才能は素材に過ぎない。才能を束ねて学問に至る。学問の研鑽を積んで知識として大成する。「美妙」が感受性の発動であるのに対して、「致知」論理は定義や推理の累積からなる。これは知識の複雑性に関する分析である。ひとつひとつの事件が積み重なって人生や伝記となり、人生や伝記が集積されて歴史となる。これは人生や歴史の複雑性に関する分析である。計算は単線的である。幾何は平面的である。「點竄」は和算の代数のことであろうが、極めて複雑で重層的である。絵画はまず単色を塗り、色々な色を重ねて形を描き、様々な形を並べて絵画として完成する。料理の基本は味である。品数を増やし、「饒」つまり晚餐の域に到達する。五つの感覚から出発して膨大な人間文化が産出される。人間にはこうした高度の認識能力が備わっている。

こうした高度の能力が発揮されて、人間文化の華が咲き匂う。言葉と文字を使用する言語能力の解明に軸を置いて、ここで、西が人間に備わる認識の能力に光りを当て、人間に備わる文化生成の能力を例示し、その奥行きを深々と照らし出していることは見逃せない。単語や漢字をひとまず「元素」に還元して、その組み合わせにより再構成するという分析的かつ構成的な手法に立ち、更に単語や漢字を組み合わせるという構成的な手法を重ねて用いることにより、言語や文章は成立する。こうした鮮やかなまでに立体的なやり方で、構成的な方法を重ねて用いる道筋をくっきりと描き出していることは誠に印象的である。

西周の経験論は思いの外に内容豊富な文化を産出する潜勢力を有する理論であった。人間文化の複雑性を、複雑極まりない人間文化を産出する根本の能力にまで溯り、人間文化を生成するいわば人間という名の文化の生産点にまで降り来て解き明かす人間の哲学なのである。

西は断片の四と五を明治七年の七月頃に書き上げたと推定される。

6. 哲学関係断片六、七の成立時点

西は『心理学』の翻訳に明治七年の五月頃には既に取り掛かっていた模様である。兵語字書の序文に次の一節がある²⁴⁾。

以明治七年五月下命於翻譯課。然時會有他繙譯之事。遷延不果。至八年三月。更下命。

明治七年の五月に兵語字書の翻訳という仕事を行えという指示があつて「翻譯課」への兼勤が命じられた。にも拘わらず「他繙譯之事」他の書物を翻訳する仕事があったため、兵語字書の翻訳の方は延び延びになってしまったという。ここで西は『心理学』の翻訳にその頃既に着手していたことを語っているわけである。付載文書には「明治七年五月陸軍

省参謀局翻譯課 兵語字書選定ノ命アリ不果」とある。「八年三月更ニ命アリ」明治八年四月には『心理学』上中の二巻が刊行されている。『心理学』の翻訳に目処が立った明治八年の三月に再び兵語字書翻訳の命が下されたことが判明する。

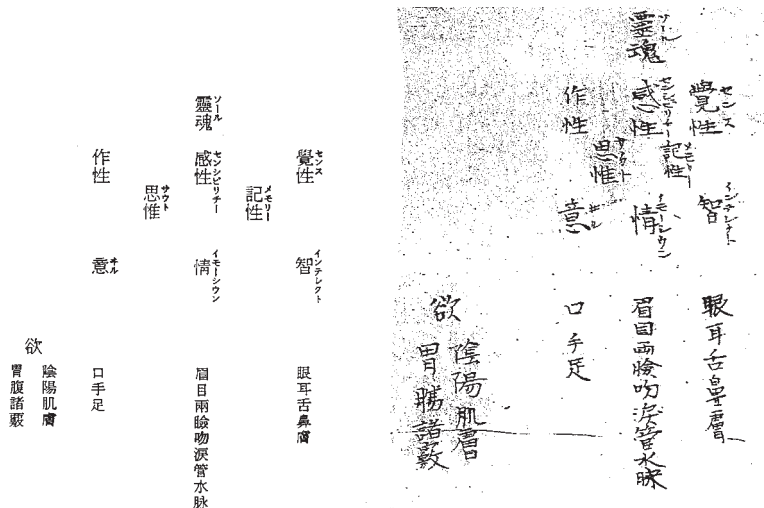
哲学関係断片の六と七は『心理学』に対応した断片である。『心理学』の訳出に取り組んだ明治七年五月の頃より後に書かれた断片であると推定される。断片の六と断片の七と断片の八の初めの二行は同じ頁に並んで書いてある。断片の八の三行目からは裏頁に続く。

まず断片の六を引用する²⁵⁾。

一身之主謂之靈魂。靈魂所居之室、而具諸官者、謂之心。心之在形、謂之腦。其外室、謂之腦蓋。魂接外物而受之用、謂之智。魂接外物而發之用、謂之意。魂既受外物而未發諸用、謂之情。故情也者、知意相半之時、知意相混之位也。

智情意という精神作用の三分法に従って、西が自らの体験に基づき精神の作用を探求し描写した記述である。「魂」が受け入れた外物の痕跡が「智」知識であり、「魂」が外物に向けて発する作用が「意」意欲である。魂には靈力が備わっているので靈魂と呼ぶにふさわしい。外物の刺激に触れた魂が外物に向けて作用を発するまでの中間の状態のことを「情」感情と呼ぶ。靈魂の示す統合作用が「一身之主」という語句に巧みに表明されているところが印象的な一文である。「脳」には「ブレイン」brainという訓が振ってある。脳は心の所在である。「心之在形」を「心之舎」と書き直しているが、心と脳とは同一である、言い換えれば脳が本体で心はその作用であるとする見方から、脳は心の宿舍つまり入れ物であるという見方に進んで行く様子が窺える。「知意相半之時」を「知思相半之時」と書き直している。西は、未発の精神状態は「意」というよりも「思」と呼ぶ方が適切であるという見方に至るわけである。

続いて断片の七を引用する²⁶⁾。



「智」intellect「情」emotion「意」will という人間精神に見える三種類の機能にそれぞれ対応する「覚性」sense「感性」sensibility「作性」という三種類の能力が人間精神には備わっている。この三種類の能力を統括する統合の能力が「靈魂」soulである。

「靈魂」は身体のどの部位よりも上位に位置し、感覚器官の報告を受け取り、身体の一部に指令を発する力を持つ。身体の一部の発する欲求を聞き取るのも「靈魂」である。「靈魂」こそ人間の中心であり、掛け替えの無い個人の本来の姿であり、本人そのものである。魂には身体の一部や精神の機能を統合する霊力が備わっていることで靈魂と呼ぶにふさわしいわけである。

断片の八のうち始まりの二行だけは同じ頁に並べて書いてある。その部分だけここに引用して置く²⁷⁾。

形體之精氣、訴於魂者、謂之欲。其訴本於缺之者、如饑渴。其訴起於充滿者、知男女之欲。充滿者洩則止。缺乏者足則止。

身体の一部が「魂」つまり靈魂に訴えかける作用が「欲」欲求である。欲求には飢えや渇きの如く欠乏に本がある欲求と、男女の求め合いのように充滿に本がある欲求とがある。充滿したら洩らせば欲求は休止するし、欠乏したら充足すれば欲求は休止する。受容と発射という枠組みで西が生命の営みを把握していることは明白である。陰陽の交合に生殖の根本があるとす東洋的な生命観になお西が立っている様子が透けて見えるようである。こうした身体の一部の代謝の動きを土台としてそれを精神の動きにまで拡張して人間の精神の示す作用を分析して行くわけである。

既に紙数も尽きているので、哲学関係断片の八以下の成立時点に関しては稿を改めて論じることとしたい²⁸⁾。

注

- 1) 国立国会図書館、憲政資料室蔵。
- 2) 全集第一巻。
- 3) 全集第一巻、解説、616頁。
- 4) 5) 6) 全集第一巻所収。
- 7) 全集第一巻、解説、632頁。
- 8) 大久保「解説」（『全集』第一巻）664頁以下及び森1973参照。
- 9) 森1969参照。
- 10) 蓮沼1983、20頁注23参照。
- 11) 全集第一巻、25～27頁。
- 12) 全集第一巻、188頁以下。

- 13) 小泉1989は内容の点検から「靈魂一元論」を『生性發蘊』と一連の作品であると位置付け、そこに西に独自の思索の展開を見い出している。その結果「靈魂一元論」は、奇しくも『生性發蘊』に後続しその内容を発展させた作品であるかの如き位置関係に置かれている。
- 14) 蓮沼1987、234頁（2）参照。
- 15) 西周文書16。西周稿本目録、116頁。朱筆で付された分類番号は甲ノ二二である。
- 16) 西周文書20。朱筆で付された分類番号は甲ノ二八である。
- 17) 西は明治六年の六月から九月にかけて「人類發展史」を翻訳している。この訳出を介して人類史に関する入門知識と並んでドイツ語に関する知識を集積し始めた模様である。
- 18) 全集第一巻、173頁。
- 19) 全集第一巻、173頁。
- 20) 同前。
- 21) 「中間種」とは複数の感覚器官に関わる知覚のことをいうのであろうか、それとも無意識ないしは下意識の感覚である仏家のいう阿羅耶識のことであらうか。感情は基本的には他人に向かう「他愛性」を帯びた作用であるのに対して、欲求は基本的には自分に存する「自愛性」を帯びた作用である。こうした用語の使用法を見れば西がなおコントの哲学の影響の下にあったことは見やすい。
- 22) 全集第一巻、175頁。
- 23) 全集第一巻、176頁。
- 24) 全集第三巻、318～319頁。
- 25) 全集第一巻、177頁。
- 26) 同頁。
- 27) 全集第一巻、178頁。
- 28) 「靈魂一元論の成立事情」神戸法学年報第23号（2007）。

典拠

- 西周 文書 国立国会図書館、憲政資料室蔵。
 大久保利謙編『西周全集』第一巻、日本評論社。
 大久保利謙編『西周全集』全四巻、宗高書房。
 森 林太郎『西周傳』（森鷗外全集第三巻、所収）岩波書店。

参考文献

- 小泉 仰 1989『西周と欧米思想の出会い』三嶺書房。
 蓮沼啓介 1980「開題門の成立事情」神戸法学雑誌30巻2・3号（9・12月号）
 蓮沼啓介 1983「西周とカント哲学」神戸法学雑誌33巻1号（6月号）
 蓮沼啓介 1987『西周における哲学の成立』有斐閣。
 森 県 1969「西周『美妙学説』成立年時の考証」国文学、14巻6号（昭和44年5月）
 森 県 1973「西周と『宮中御談会』について」書陵部紀要、25号（昭和48年）

『北東アジア研究』第14・15合併号（2008年3月）

キーワード 西周文書 哲学 心理学 実在 観念 主観 客観 感性 知覚 靈魂

(HASUNUMA Keisuke)